
久遠の愛・・・そして・・・

三笠 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久遠の愛・・・そして・・・

【Nコード】

N2445Y

【作者名】

三笠 黎

【あらすじ】

寝たきりになった父の介護を終えた母と妻・・・
その1年後に・・・

(前書き)

久遠の愛と名付けた父の介護生活の終わりを綴った話の1年後・・・
くおんのあい

今から1年と1週間前の2010年4月8日・・・

妻と母が20年以上も介護し続けた父は静かに息を引き取りました。妻と母と3人で父の最期を看取った私は家族、親族に知らせる為に病院の外に出て

携帯電話をかけていました・・・

春の風に乗って桜が目の前をひらひらと舞っていきました・・・

私がめぐみと出会った時、既に父は脳梗塞を患っており、不自由な身体になっていました。

しかし、父はものすごいハンサムでダンディ伊達男でした。

父はパン職人で母と結婚すると目黒にパン屋さんを構えて2男2女を育てました。

ハンサムなパン職人で阪神ファン！

気骨溢れる・・・と言うより・・・

父は物凄い厳しい方で言葉より先に手！みたいないわゆる・・・日本のおヤジだったそうです。

特に母に対しても厳しくて激情剥き出しで怒鳴り捲っていました。

しかし、そんな父も末っ子の妻は特にかわいかったようで、父は妻をかわいがり、

妻も父を大切に思っていました。

父が最初に倒れたのは妻が小学校6年生の頃で店を離れられない母のかわりに

妻が父の着替えを持って遠路一生懸命自転車を漕いで病院に行きました。

父の体調が悪くなるとそれまでの生活が一変しパン屋は廃業、
激しく厳しかった父は母の介護なしに生活していく事が出来なくな
りました。

私と結婚した妻は美容師になっていましたが、父の病状悪化に合わ
せて

美容師をやめ本格的に父の介護を行うようになりました。

ホームヘルパーの資格を取得・・・

私たちは父と母の住む家のすぐ近くに居を構え、本格的な介護生活
が始まりました。

母は頑固な所があり・・・

妻も一途な性格なので・・・

介護をしながら、生活しながら、しょっちゅう二人は衝突しました。
横で見ている私は結構ハラハラする事もあり・・・
でもぶつかりあいながら懸命に父を介護しました。

それは完璧なものでした。

きれいごとだけでは済まない厳しい介護生活でしたが本当に完璧な
ものでした。

寝たきりになってから10年間もの間・・・

父には褥瘡一つ無かったのです。

父は逝きました・・・

桜舞う2010年の春・・・

激しい介護生活を終える事になった妻と母は自由を得たはずでした。
・

特に母は50年を越える父との結婚生活で初めて得た自由な時間で

した。

お店の仕事、子育て、厳しい父、介護生活になった父・・・
70歳を越えて、生涯で初めて得た自由な時間・・・

母は食べるのが好きな人だったので私達は3人であっちこっちに食事に行きました。

父を介護している間は、必ず誰か一人が父を見ていなくてはいけなかったのです。

3人で出かける事は無かったです。

しかし・・・

父が亡くなってから母は急に老け込んでしまいました。

健康なのに、体重が8キロも落ちて物忘れがひどくなりました。

介護している時は妻と交代で僅かな時間を見つけては

自分で自転車を漕いで活発にお買い物に行ったり、

健康ランドに行っていた母は、父が亡くなった後、自宅に籠りがちになりました。

私達がお食事に連れ出す時はとても楽しそうなのですが、疲れやすくなり、

ますます物忘れがひどくなってきました。

あるとき自転車で転倒して以来、あれだけ活発に漕いでいた自転車にも全く乗らなくなりました。

しかし、定期的に受けている健康診断でも全く問題なく、健康チェックで往診に来てくれている

お医者様やマッサージの先生にも健康上で特に指摘される事はありませんでした。

4月12日火曜日

「少し物忘れが酷いし、ちょっと言葉に呂律が回っていない感じがするから

念の為に脳を見て貰った方が良いよ」

と、往診のマッサージの先生に指摘を受けて母を病院に連れて行き、脳のCTを撮りました。

正直、認知症などの可能性があるかなと思っていた私達でしたが、結果は全く問題ありませんでした。

老人性のうつ症状などもあるので少し外に出て気分転換をすると良いですと言われました。

母は最近少し食欲が落ちていて3人での外食も控えていたのですがこの診察の後、母はお腹すいて美味しいものが食べたいと言ったので、久しぶりに3人で食事を楽しみました。

この日の母は笑顔でよく食べ、これから気分転換も兼ねてあのお店に行こう、このお店に行こう、

この健康ランドに行こうと3人で楽しくお話しをしました。

食後に母の気分をスッキリさせる為、私達夫婦は母のおウチを徹底的にピカピカに大掃除しました。

私達が掃除をしている最中、胃休めでベッドに横になっている母が寝ぼけたように何度も私達の名前を呼び

「ありがとう」「ありがとう」

と言いました・・・

本当に、何度も、何度も・・・

何でそんなに「ありがとう」「ありがとう」と言うのか解りませんでした。

今思えば・・・

何故あの時、私達はあれだけこのおウチを掃除をしたのかも解りません・・・

何故か私も妻もやらなくてはいけないような使命感にかられて徹底的におウチをキレイにしたのです。

その翌々日・・・

4月14日木曜日

母が入院しました・・・

朝、母の様子を見に行った妻はまだ眠っている母を起こそうとすると何だか気だるそうで、よくよく見ると足先が真紫に変色していました。

言葉は普通で熱もなく、ただ疲れている感じでしたが、妻はただ本
能で

「あぶない！」

と感じて救急車を呼びました。

病院に到着する頃から・・・

みるみる内に母の容体が悪化しました・・・

横にいる妻も呆気にとられる位の悪化でした。

心不全による心臓肥大、心房細動、胸水、肺炎、腎疾患、閉塞性動脈硬化症・・・

酸素濃度は落ち、血圧の極度な低下・・・

私が駆けつけた時、母はHCUで両手組を拘束された状態で酸素マスクを装着され、

黄疸が出た顔色で眠っていました。

落ち着いているかなとちょっと安心した途端に両手両足をばたつかせながら暴れ始めました。

身体に何かを付ける事が嫌いでアクセサリーとかも一切付けなかった母、とにかく健康で、パワフルで

この年齢になる今まで出産の時以外に入院した事が無かった母が全身に管をいれられて、

心電図やサチュレーションのセンサーを装着され、酸素マスクをされている・・・

鬱陶しくて我慢出来なかったようです・・・

動かないように拘束された手首を動く範囲でばたつかせながら、不自由からの解放を求めて暴れました。

尿管カテーテルの管を掴んで引っ張ろうとすりました。

どこかに血栓があるので、激しい動きは危険なのですがひたすら暴れました。

私は兄と二人で何とか抑えていましたが

本当に重病人とは思えないとんでもない力で必死に抵抗してきました。

当初は言葉が成り立っていたのですが、段々意識混濁してきて会話が成り立たなくなってきました。

暴れ疲れて眠りそうになった時・・・

母は妻に一言・・・

「お米残ってるから・・・」

と呟きました。

何故この時に突然「お米」の事を言ったのか・・・
解りませんでした。

この言葉が母がはっきりとした意識の中で言った最期の言葉となりました・・・

ただ、逆にこれだけ暴れる体力があるのできつと復活すると信じました。

小康状態だったので家族は皆、夜に帰宅しました。

翌日・・・

早朝、病院より電話があり危篤の知らせ・・・

慌てて駆けつけると母はひたすら激しく呼吸をしていました。
意識はないのですが、呼びかけると反応してくれるような気がしました。

心拍は220という完全な心房細動状態・・・

どうやら血栓が脳に回ったらしく40度を超える熱を出していました。

最早、内科的な投薬治療しかないと言われました・・・

HCUから個室に部屋を移りました・・・

危篤と言われましたが、母は再び小康状態に落ち着きました。

家族や親族が揃い、皆が母に会いにきました。
これは母の恐るべき生命力だったのです。
母は皆に会いました・・・

16時17分・・・

本当に静かに・・・静かに・・・静かに・・・

母の心臓が止まりました・・・

母はいわゆる美人ではありませんでした。どちらかと言えば個人的な感じでした。

しかも気性の上下もあり・・・普通に考えるとお付き合いが難しいタイプの女性かもしれません。

でも私はかわいがって貰ったな。

妻と母は仲が良いのか悪いのか・・・

妻は頑固なところがあり・・・

母は一途なところがあったので・・・

でも、いつもこの二人は手を携えて父の介護をしていました。

一緒にお買い物をして、一緒にごはん食べて・・・

私達は本当に素敵な家族であり、母と妻は本当に素敵な母娘でした・

・

妻に顔を撫でられながら、母は息を引き取りました。

母の顔はとても穏やかで、静かな笑顔でした。

妻が泣き崩れました・・・

私も胸が潰れそうになりました・・・

少しの用事でこの場を離れていた兄達に連絡しなくてはいけないと思ひ、

何とか自分を奮い立たせ、病院の外に出て携帯電話をかけました・・・

・

春の風に乗って桜がひらひらと舞っていきました・・・

4月15日金曜日

母は逝きました・・・

桜舞う2011年の春・・・

父が亡くなってちょうど1年と1週間・・・

昨年に比べてちょうど1週間遅れの桜が

私達の前に1年前と全く同じ光景を描きだしました。

妻はうずくまり立ち直れません・・・

妻は誰よりも父を大切に思ひ、父に全てを捧げました。

しかし、ある意味でそれ以上に母を想っていました。

この世で誰よりも喧嘩してぶつかりあいながら共に手を携え続けた
母娘の愛

・・・久遠の「愛」・・・

史上最高のファザコンだった妻は史上最高のマザコンでした。

私はこの史上最高のファザコンとマザコンの妻を史上最高に誇りに
想っています。

1年前に父を担当してくれた葬儀社の方々が来てくれて、遺体を家
に連れて帰ってきました。

まるでこの事の準備をしていたようにおウチはピカピカに掃除され、
片付いていました。

枕飾りをされ、妻に綺麗にお化粧された母・・・

何とも・・・

菩薩様のように美しい母が眠っていました。

少し笑顔をたたえたような優しい女性の顔・・・

お母さんはこんなに美しい人だったのだと皆が思いました。

兄が誰も聞いた事がないエピソードを話し始めました。

父はハンサムでカッコ良いモテモテ男だったけど、何故やや美人ではない母と結婚したのか・・・？

実は父が母に夢中になって、どうしても母と結婚したいと言い張って家族の反対を押し切って結婚したそうです。

厳しい父の姿・・・実は母に甘えていた父・・・父は私達と同じ、女性の愛を求める普通の甘えんぼさんの

男性だったのです・・・

母は鈍感でもあり、変わった所がありながらもそれをまるごと包んで長い人生を歩いてきた最高の女性でした・・・

この美しい顔を知っていたら確かに惚れるな・・・

父は自分が先に逝って皆を見守ろうと頑張ったのですが1年で耐えられなくなってしまいました。

「お母さん・・・お母さん・・・」

母を呼んだのでしょうか・・・

母は本能的に全てを感じ取り、父の元に行く事にして私達と最期のお食事を楽しみ・・・

お客様が来ても大丈夫なようにお掃除の段取りを取っていたのです。

明日のお通夜、お団子を作り、盛り飯を作る為にお米を1合炊かなくては いけません・・・

母の家の米ビツには・・・

お米が1合だけ残っていたのです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2445y/>

久遠の愛・・・そして・・・

2011年11月5日15時14分発行